

大学生のスマートフォン利用が孤独感に及ぼす影響

葛田 祐子

近年、携帯電話に代わりスマートフォンが急速に普及している。特に若者への普及率は高く、大学生のスマートフォン保有率は94.9%にのぼる。現代の大学生はスマートフォンの利用を介して広い対人関係を持つことが可能となった。携帯電話が普及するとともに、携帯電話とコミュニケーションに関する様々な研究がなされてきたが、これらはスマートフォン普及以前の研究であり、スマートフォンの利用と対人関係について検討した研究は少ない。時代の変化とともに若者の友人関係にも変化があるのではないかと考えられる。なぜならばスマートフォンは携帯電話と類似した機能を持ちつつも、全く新しい機能を持ち合わせているからである。スマートフォンがもたらす新しい側面に着目すると、さまざまな機能がアプリケーションとして提供されることであろう。よって、大学生のスマートフォン利用が孤独感にどのような影響を与えるのかを明らかにすること、および大学生の対面・IM・Eメール使用による社会的ネットワークの構成を明らかにし、孤独感に与える媒介効果を明らかにすることを本研究の目的とする。

本研究では分析手法としてAmosによる共分散構造分析を採用した。共分散構造分析には交差遅れ効果モデルを用いた。調査は筑波大学の学群生を対象に2波のパネル調査を実施した。調査項目は個人情報、シャイネス度、携帯電話・スマートフォンの利用状況、対面・IM・Eメールの3つの社会的ネットワーク、孤独感について設定した。

調査の結果、先行研究と同様に依然としてFTFの社会的ネットワークが最も充実していることがわかった。IMの利用について、異性同士の社会的ネットワークが孤独感に悪影響を及ぼすという結果が得られた。Eメールに関しては、特別な関係の相手とのコミュニケーションに利用されることが示唆された。また検討したモデルの結果から、孤独感の高い人はそもそもEメールを利用しないこと、反対に孤独感の低い人はEメールを利用して社会的ネットワークを形成することができることがわかった。シャイネスについて、今回の調査ではIMでは影響がみられずEメールでのみ影響がみられた。今後の課題として、本研究でスマートフォンの利用が孤独感に影響を与えることが明らかとなったが、分析するサンプル数が少なくモデルの推定が十分にできなかった。より多くのサンプルを集め、さらに詳細に検討することが望まれる。

(指導教員 歳森 敦)